

信州方言の保存・継承を考える

外から見た信州方言・群馬方言から見た信州方言

佐藤 高 司

一、はじめに

本論文は、信州方言を市民レベルで守り伝えていくべきであることを主張するものである。まず、信州方言を学術的な視点と一般市民的な視点との両面から群馬方言と比較しつつ確認する。次に、日本社会における日本語方言の認識の変容に触れつつ、無形文化財としての信州方言を、様々に工夫を凝らし楽しみながら市民レベルで守り伝えていくべきであることを主張する。本論文は、平成二十九年二月十八日に、上田駅前ビルパレオ二階会議室において行った上田女子短期大学公開講座「外から見た信州方言・群馬方言から見た信州方言」の講座内容を再構成して論文にまとめたものである。なお、本論文では、「信州方言」は長野県方言を指し、「群馬方言」は群馬県方言あるいは上州方言と同意である。

本論文の構成は次のとおりである。第一に、「方言」という用語の一般的な解釈と学問的な解釈の違いを確認し、日本語方言区画における信州方言と群馬方言の位置づけと、信州方言、群馬方言それぞれ内部の方言区画について述べる。第二に、複数の市民向けの都道府県別方言紹介図書から特徴的な信州方言を取り上げ、信州方言のどのようなものが県外から注目されるのかを再認識する。第三に、日本社会の日本語方言に対する認識の歴史的变化を辿ったうえで、現代の信州方言に対する認識を様々な社会現象から浮き彫りにする。最後にまとめとして、方言かるたなどを例に、市民レベルでの信州方言の保存・継承のあり方を考える。

二、「方言」という用語

「方言」という用語には様々なとらえ方がある。地域性に視点を当てれば、全国共通語の対義語として、その土地の言葉としての「方言」がある。場面性に視点を当てれば、改まった言葉の対義語として、仲間内で肩肘張らずにくつろいで話す言葉としての「方言」がある。使用者の年代に視点を当てれば、若者言葉の対義語として、高齢者の話す言葉としての「方言」がある。使用者の性別に視点を当てれば、男女共通語の対義語として、男言葉、女言葉といった「方言」もある。使用者の所属社会に視点を当てれば、一般語の対義語として、専門語、職業語、隠語、キャンパス言葉などの「方言」がある。本論文における「方言」は、地域性に視点を当てた全国共通語の対義語としての方言である。

ここでは、もう少し踏み込んで、本論文における「方言」という用語を規定する。本論文における「方言」は、特定の言語（日本語）の中に存在するバリエーションであり、かつ、特定の地域の言語の総体と規定する。言語の総体とは、語彙、音韻・音声、文法等の言語の要因すべてを指す。また、「方言」は、グラデーションを持った言葉の連続体でもある。信州方言と群馬方言は隣接する方言であるが、両方言の境界線を境に、明確に一方が信州

方言でもう一方が群馬方言となるようなことはあり得ないということである。信州方言の特徴を強く有する地域から群馬方言の特徴を強く有する地域に向かって、少しずつ信州方言の特徴が薄まり少しずつ群馬方言の特徴がみられるようになっていくということとで、このことをして「グラデーションを持った」と表現する。

三 日本語方言区画における信州方言と群馬方言

日本語方言区画とは、日本中に方言はいくつあるのかを論じる研究である。この研究では過去に多くの方言研究者が様々な論を展開してきたが、現在では、東条操の方言区画を基準に考えるのが一般的である（[図1](#) 参照）。

それによれば、信州方言は、本土方言 ～ 東部方言 ～ 東海・東山方言 ～ 信州方言といった括りとなる。一方、群馬方言は、本土方言 ～ 東部方言 ～ 関東方言 ～ 群馬方言といった括りとなる。信州方言と群馬方言とは、隣接しているものの、十六の日本語方言区画においては、信州方言が東海・東山方言に、群馬方言が関東方言に属し、異なる方言区画に属することとなる。

信州方言が属する東海・東山方言では、音韻上の特色として、アイの連母音がエーとなる地域が見られる。また、語中のガ行音



【図1】方言区画（真田編著 2011より）

が鼻濁音である地域が関東地方より広い。文法上の特色としては、推量や意思の助動詞としてズ・スラが広く使われる。また、古語を受け継ぐと考えられる「ナナ+動詞+ト」のような禁止表現が見られる地域があったり、動詞の否定の助動詞「ない」に対しての用いられる地域や「出した」をタイタ、「貸した」をカイタのようにサ行五段活用動詞にイ音便が用いられる地域があったり

する。

群馬方言が属する関東方言は、音韻上の特色として、アイの連母音をエーと発音する地域が多い。文法上の特色としては、いわゆる「関東べい」と呼ばれる推量のベーが用いられる地域が広くみられる。

四 信州方言と群馬方言の内部方言区画

信州方言と群馬方言のそれぞれの内部の方言区画を確認する。

信州方言については、馬瀬（一九九二）によれば、奥信濃方言、北信方言、東信方言、中信方言、南信方言の五つの方言に区分される（【図3】参照）。群馬方言については、古瀬（一九九七）によれば、北・西部方言、中央部方言、東南部方言の三つの方言区画に区分される（【図2】参照）。

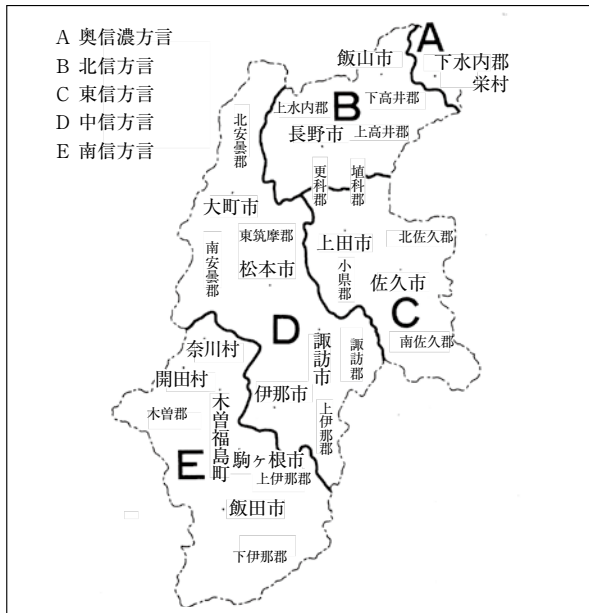
【図2】と【図3】は、信州方言と群馬方言のそれぞれ内部の方言区画を明示するために個別に示しているが、地図上では、東に群馬県、西に長野県という位置関係で隣接している。つまり、群馬方言の北・西部方言と信州方言の奥信濃方言、北信方言、東信方言とが隣接の位置関係にある。

前項では、信州方言と群馬方言とは十六ある日本語方言区画に



【図2】群馬県方言区画 (古瀬 1997より)

おいては異なる方言区画に属することとなると述べたものの、二で述べたように、各々の方言はグラデーションを持った言葉の連続体であるので、信州方言の奥信濃方言、北信方言、東信方言と群馬方言の北・西部方言とは極めて似通った方言であると言える。言い換えれば、信州方言の奥信濃方言、北信方言、東信方言の内
部では、東に向かうほど（群馬方言に近づくほど）、東海・東山



【図3】長野県方言区画 (馬瀬 1992より)

方言の特徴が薄まり群馬方言の特徴に近づくという現象が起こっていると考えられる。また、群馬方言の北・西部方言の内部分は、西に向かうほど（信州方言に近づくほど）、関東方言の特徴が薄まり、信州方言の特徴に近づくという現象が起こっていると考えられるのである。

五 方言図書から見る特徴的な信州方言

ここでは、複数の一般市民向けの都道府県別方言紹介図書から、信州方言の特徴としてどのような信州方言が紹介されているのかを示すことで、特徴的な信州方言を確認する。

五―一 『方言と地図』

井上（二〇〇九）は、イラストによる都道府県ごとの方言地図が特徴的な方言とともに示され、その都道府県の方言を地理的な視点から紹介している。

長野県のページでは、「ずく ださねばね」（やる気を ださな くちゃね）が大きく取りあげられ、その他に「せったか せねか せってみろー」（言ったか 言わないか 言ってみろー）、「なな かまっと」（いじめちゃだめだよ）、「いかず」（いきましよう）、「じょんのびだ」（楽だ）、「とんで きてー」（走って 来いー）、「みや ましい」（働きものだ）、「めた いけねえわい」（もう全然 ダメ ですよ）などがリンゴや牛のイラストとともに紹介されている。

方言地図による県内の方言の違いを示すイラストにおいては、北信方言の「ががっぺえ」（まぶしい）・「もうらしい」（かわいそう）が、東信方言の「ががっぼしい」（まぶしい）・「もげえ」（か

わいそう）が、中信方言の「ひどろってえ」（まぶしい）・「むごい」（かわいそう）が、南信方言の「ひどろっこい」（まぶしい）・「おやげねえ」（かわいそう）が、それぞれ紹介されている。

さらに、いかにもご当地らしい言葉、各県の方言に見られるおもしろい特徴や特にユニークな言葉では、「で」「ずくなし」「おおずく」「こずく」が紹介されている。「で」は、「スーパ―の前」にあるのが、郵便局すら？という用例を用いて、「前」の後に「で」がつくことに注目する記述がなされている。「ずく」については、「何かをやるための意思や行動力」を指す言葉として、長野を中心とした甲信越地方でよく使われるとされている。

五―二 『中部の方言』

井上・吉岡（二〇〇四）は、全国各地の方言を暮らしの中の「生活のことば」として位置づけて、日本語方言を紹介するシリーズ図書『調べてみよう暮らしのことば』全七冊のうちの一冊である。児童・生徒の総合的な学習の資料としても活用されるよう編集されている。

長野県のページでは、用例とともに、「つもい」（きつい）、「い ただきました」（ごちそうさまでした）、「かう」（掛ける）、「へら」（舌）、「まえで」（前）、「じっと」（たえず、しよっちゅう）、「く

かや」(くかな?)、「とぶ」(走る)が紹介されている。例えば、「つ
もい」では、「靴がつもなくなった」「この服おなかのところがつも
くなくなった」「障子がつもい」という用例とともに、「服などがきつ
いことをいいます。戸などの動きが悪いときに使うこともありま
す。」と紹介されている。

また、人気のある特有方言、大人から子供まで愛着を持ち、使
い続けているユニークな言葉として、「くずら・くづら・くら・
くつら」(くなのでしょう・くのでしょう、くでしよう、くたの
でしよう・くたでしよう)が紹介されている。これらは長野県だ
けではなく、山梨県、静岡県、愛知県、岐阜県の推量する言い方
として示されている。

さらに、同書では、若い世代を中心に仲間うちの言葉として定
着する方言「新方言」を取りあげている。長野県の新方言として
取りあげているものは、「くしない」(くましよう、くでしよう)
である。「一緒に行くしない?」「一緒に行きませんか、行きまし
う」のように、相手を誘う場合に使われる。また、「かわいいし
ない?」「かわいくない? かわいいでしょう?」のように、相
手に確認を求める場合にも使われると紹介されている。

五―三 『出身地^{いなか}がわかる! 気づかない方言』

篠崎・毎日新聞社(二〇〇八)は、「気づかない方言」を都道
府県別に扱った書籍である。「気づかない方言」とは、地方にお
いて改まった場面でも方言とは気づかずに使われるため、出身地
以外の改まった場面で使用した際に方言と指摘されるなどして、
初めてそれが方言であったと気づくような方言を指す。

長野県の「気づかない方言」として、「前で」を「前で」と
いう」が大きく紹介されている。待ち合わせをする際、「アルタ
の前で待ってるよ」という人がいたら、恐らく長野県出身の人
だ、と用例付きで示されており、「前で」の最初の「で」は助
詞ではなく、「前で」で一つの単語」と解説している。

その他、「ほけている」(しばらく食べ忘れたりんごなどがパサ
パサになっておいしくない状態、「水くれ当番」(水やり当番)、「よ
かる」(もたれかかる)が紹介されている。

以上の三冊の方言紹介図書から見ると、信州方言として
外から見た特徴的な信州方言は、「ずく」「くづら」「まえで」な
どが代表的なものと考えられる。このような信州方言を代表する
方言を、後述の市民レベルでの方言の保存・継承活動においては、
上手に活用していきたいものである。

六 方言に対する日本社会の認識の歴史的变化

六一一 生活密着語時代

明治時代以前の日本において、方言は生活に必要な言葉そのものであった。その時代の多くの庶民は、基本的に生まれた地域で生活し、生まれた地域でその生涯を終えるという地域完結的な時代であるので、方言さえ話せばその土地で生きていくことができた。つまり、方言は生活密着語であった。遠く離れた日本の他の地域の人とコミュニケーションをとることはほとんどないので、全国共通語の必要はなく、人々にとって、方言こそが唯一の日本語であった。その意味において、明治時代以前の日本では、方言は生活密着語であり、なくてはならないものであった。

六一二 共通語強要時代

江戸時代が終わり、日本は世界に開かれ日本もまた世界へ進出していこうという時代、明治から大正を経て昭和二十年ごろまでの富国強兵の時代になると、方言は矯正されるものになった。全国共通の日本語が強要されるようになったのである。世界に台頭するために、強い軍隊を作らなければならなかったからである。軍隊の兵隊たちが出身地によって言葉が違っていて意思疎通が可

能でないと軍隊として成り立たないからである。上官の命令が部下全員に正確に行き渡り徹底されるためには、同胞である日本人すべてが共通に理解しあえる共通語が必要だったのである。そこで日本は、教育力を用いて方言を矯正し、日本全国津々浦々に共通語を徹底しようとし、沖繩では「方言札」のような、いわゆる「方言狩り」が行われたのである。つまり、この時代は、方言は封印され共通語が強いられた時代なのである。

六一三 共通語化時代

太平洋戦争が終わり、日本は目覚ましい復興を遂げ高度経済成長時代へと向かうと、テレビ、ラジオが庶民にまで普及するようになる。マスメディアが隆盛を極め、大都市・東京に文化のすべてが集中するようになった。文化の一極集中型時代である。文化の象徴ともいえる言葉も、東京の言葉を基盤とした全国共通語に庶民の意識が集中するようになり、共通語が良い言葉、かついい言葉、おしゃれな言葉と思われるようになった。すると、共通語の対極にある方言は、悪い言葉、みつともない言葉、ださい言葉と思われるようになり、軽視されるものになっていった。このように方言を恥ずかしいもの軽蔑するものと感じて自分の方言を隠そうとする感覚を、柴田武氏は方言に対する劣等感として「方

言コンプレックス」(柴田一九五八)と名付けている。この時代には、全国共通語は一気に日本全国に普及し、方言は、前の時代とは異なる意味で姿を隠したのである。この時代は、方言が消滅へと向かい始めた共通語化時代といえる。

六―四 方言文化財化時代

時代がテレビからインターネットへと進んだ二〇〇〇年ごろから、東京一極集中だった庶民の文化は、地方の時代へと移行する。一極集中型時代から分散型時代への移行である。この時代になると、方言は見直されるようになる。それと時を同じくして、二〇〇五年ごろ、女子高生の間で方言ブームが沸き起こる。全国共通語ばかりがもてはやされた時代に飽きた若者には、今まで聞いたこともない他地域の方言が斬新で新しい言葉として映ったのであろう。方言ブームは長くは続かなかつたものの、分散型時代、地方の時代は現在も続いており、方言を地方の文化としてとらえ、「方言を楽しもう」という社会風潮が続いている。

例えば、若くて秀麗な女優が熊本方言で数え歌を歌っていたり、人気のある女性お笑い芸人が津軽方言を話す姿をあたかもフランス語を話しているように見せたり、というような乗用車のコマーシャルが話題を呼んだ。これらの例は、方言をかわいく感じ

方言を楽しもうとする社会風潮の表れといえる。また、最近では、映画で話題になったテーマソングを各地の方言で歌ってインターネット上にその動画をアップすることが盛んに行われたりもしている。方言を市のコマーシャル映像に積極的に取り入れた宮崎県小林市のピーアール動画も話題になった。

これらは、一時代前の方言を軽蔑する方向とは全く逆の流れであり、方言を楽しみながら後の時代に残していこうという、むしろ「方言尊重」の社会的な流れである。「方言を大切にしよう」「方言を守っていこう」という社会的な機運の高まりであり、いわば方言の文化財化の時代と言えよう。

七 現代の信州方言に対する認識

本項では、前項で述べたような日本人の方言に対する認識の変化を踏まえ、現代の信州方言が長野県においてどのように認識されているのか、具体的な社会事象の観察から考えてみる。長野県においても「方言文化財化」の時代にあることが確認できる。

七―一 方言かるた・トランプ

HP「全国郷土かるた資料館」(注1)によれば、長野県に

おいては、【表1】に示す通り、八作品の方言かるた・トラパンが存在する。かるた文化が盛んなことを誇る群馬県において二〇〇五年に「ぐんま方言かるた」が製作販売されるまで方言か

【表1】長野県の方言かるた・トラパン

名称	地域、発信地	制作、発行(年)
諏訪の方言カルタ	諏訪市	情報・文化のまちづくり 市民協議会 (2010)
続・諏訪の方言カルタ	諏訪市	まちづくり市民協議会 情報文化部 (2011)
信州茅野の方言カルタ	茅野市	ひじろの会 (2015)
称津(ネツ)方言カルタ おらは	東御市	称津地区活性化研究委員 会 (2010)
中川村方言かるた	上伊那郡中川村	夢里人(ムリト) (2012)
安曇野方言カルタ	北安曇郡池田町	池田町囲炉裏端いろりばた 愛好会 (2007)
青木の方言かるた	小県郡青木村	まっぽっくりの会 (2015)
飯綱町方言かるた トラパン	上水内郡飯綱町	飯綱町PRワーキング グループ

るたが一つも存在しなかったことに比べ、信州方言を地域の文化に活用しようという長野県民のセンスのよさを伺い知ることができる。

七二 方言コマージュ

テレビコマージュに信州方言を取り入れた例がある。地方色を前面に出したペットボトル飲料水(烏龍茶)のコマージュである。

数秒のコマージュの内容は次のようなものである。画面右上に大きく「長野県」と表示され、豊かな自然を背景に、若い女性がペットボトルに入った烏龍茶を見つめ、「烏龍茶なのに日本のけ？」とつぶやく。その後、カメラに向かって「こいつなんか、変わってるじゃない？」と言い、一口ウーロン茶を飲み、再び「日本って、おいしいにー」とカメラに向かって言うというものである。コマージュは、最後に商品名と商品がアップになって終わる。

イントネーションもアクセントも堂々とした信州方言の若い女性のみずみずしく、生き生きとした信州方言とともに烏龍茶のさわやかさが伝わってくる。信州方言が商品の価値を高めている良例ととらえることができる。

七―三 方言ポスター

二〇一六年にヒットした映画に「君の名は。」という作品がある。長野県出身の新海誠監督の長編アニメーション映画である。その映画のポスターでは、主人公の男女二人が立つ間に光が輝き、その上の空には「君の名は。」と題字が大きく書かれている。

方言ポスターは、その題字が「おめさん、誰ずら。」に代わっている（図4）。インターネット上に公開されていたそのポスター（注2）には、「君の名は。」長野県民方言「おめ」と名付けられている。映画監督が長野県出身者であることも影響するのかもしれないが、題字をわざわざ方言に書き換えたポスターを制作することには、笑いやジョークを超えた長野県民の信州方言に対する愛情の存在を感じざるを得ない。



【図4】方言ポスター

七―四 方言ラインスタンプ

主にスマートフォンで使用される、「ライン」というメッセージをやりとりする無料通信アプリケーションがある。そのなかで、「スタンプ」と呼ばれるメッセージのやり取りの際に使う、文字に加えて気持ちやメッセージをイラストで表したものがあ。その信州方言版がある（図5）。（注3）。

「ライン」では、音声を伴わない文字のみのメッセージの交換であるので、細かな感情や感覚がなかなか伝わりにくいだけに、このような方言を用いたスタンプは、大変有効なツールになりうる。特に、ラインを主なコミュニケーション手段としている若い世代においては、適切な感情や感覚を伝え合う最も有効な言語として、方言の価値を再認識する絶好の機会となると考えられる。



【図5】方言ラインスタンプ

八 信州方言の保存・継承のあり方

前項で見てきたとおり、長野県においても信州方言を市民レベルで楽しみつつ、方言の特性を活かして現代的に有効に使い、方言を尊重していこうとする社会的意識を確認することができる。信州方言の保存・継承につながると思われるこれらの方言の活用は、方言かるた・トランプ、コマージュ、ポスターなど、以前から用いられているオーソドックスな方法に、インターネットという媒体が加わったことで、その方法に無限の広がりを見せているといえよう。その最たるものが方言ライインスタンプであった。

今、日本社会は、方言を保存・継承していこうという機運に包まれている。方言の存在を知り、方言のよさを知り、そして、楽しみながら方言の使い手を育てていこうという社会の流れである。信州方言の保存・継承も、その活用に見られるように、既存の方法はもちろんのこと、新しい時代に沿ったもの（例えばライインスタンプのようなもの）まで、変化を重ねる新しい時代に対応しながら市民レベルで試みられて行かねばならないだろう。言葉が時代とともに変化するように、方言の保存・継承の形も時代の変化を受けて、多岐にわたっていくべきなのである。

九 おわりに

二〇〇九年、ユネスコは「消滅危機言語」を発表した。その二五〇〇の消滅危機言語のリストの中には、日本で話されている八言語（アイヌ語、八丈語、奄美語、国頭語、沖繩語、宮古語、八重山語、与那国語）があった。しかし、消滅が危惧されるのはこれらだけではなく、日本各地の伝統的な方言も消滅の危機にある。信州方言も群馬方言もその一つである。方言は地域文化の象徴（文化財）であり、大切に語り伝えていかなければならない言葉なのである。

「方言を大切にしよう」「方言を守っていこう」という方言の保存・継承活動へとつながっていく社会的な機運が高まる中、われわれ市民は、われわれの文化財である方言を、信州方言も群馬方言も、時代に照らし、様々に工夫を凝らし、楽しみながら守り大切に伝え育てていきたいものである。

謝辞 上田女子短期大学公開講座では、当日、ご出席いただいた

地元の皆様いろいろなとお教えいただきました。また、同大学の大橋敦夫先生はじめ大学関係者の皆様には大変お世話になりました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。

【参考文献】

井上史雄監修（二〇〇九）『方言と地図』フレーベル館

井上史雄・吉岡泰夫監修（二〇〇四）『中部の方言』ゆまに書房

大西拓一郎（二〇〇八）『現代方言の世界』朝倉書店

古瀬順一（一九九七）『群馬県のことば』明治書院

佐藤高司・本多正直（二〇一七）『群馬県民の知らない上州弁の世界』

「ぐんま方言かるた」の秘密』上毛新聞社

真田信治（編著）（二〇一一）『方言学』朝倉書店

篠崎晃一・毎日新聞社（二〇〇八）『出身地がわかる！気づかない方言』毎日新聞社

い方言』毎日新聞社

柴田武（一九五八）『日本の方言』岩波新書

馬瀬良雄（一九九二）『長野県史方言編』長野県史刊行会

注1 全国郷土かるた資料館

<http://taki-forest.my.coocan.jp/karuta/karuta-46.html>

注2 「君の名は。」長野県民方言Ver. ツイッター

<http://twinavi.jp/topics/tidbits/57c6cd52-75e8-4a0f-8ecc-2a0f5546ec81>

注3 LINE STORE ちほ 信州弁

<https://store.lineme/stickershop/product/1059866/ja>